

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意
清熱剤 清臟腑熱剤 14		
りゅうたんしゃかんとう 竜胆瀉肝湯	清瀉肝胆実火・清泄下焦湿熱	竜胆草 6g・黄芩 9g・山梔子 9g・沢瀉 12g・木通 9g・車前子 9g・当帰 3g・生地黃 9g・柴胡 6g・生甘草 6g 水煎後、丸剤にして1日2回6~9gずつ服用してもよい。
医方集解	<p><主治></p> <p>肝胆実火 いらいら、怒りっぽい、はげしい持続性の頭痛、めまい感、目の充血、眼痛、耳鳴、耳痛、突発性難聴、口が苦い、胸脇痛、舌の尖辺が紅、舌苔が黄、脈が弦数で有力などを呈す。</p> <p>下焦湿熱 排尿痛、排尿困難、尿の混濁、残尿感、陰部の掻痒、腫脹、発汗、悪臭ある黄色帯下、インポテンツなど、舌苔が黄膩、脈は滑。</p> <p><病機></p> <p>肝胆実火の上擾、あるいは肝経湿熱の下注（下焦湿熱）による病変である。 暴怒、五志過極、肝鬱化火などにより肝胆実火が生じ、実火が肝胆の経脈に沿って上擾するので、はげしい持続性の頭痛、目の充血、眼痛、めまい感、耳鳴、耳痛などが現われ、肝胆の疏泄が失調するためにいらいら、怒りっぽい、難聴、口が苦いなどが発生し、胸脇に波及すると胸脇痛もみられる。舌尖辺が紅、舌苔が黄、脈が弦数で有力は、肝胆実火を表わす。</p> <p>肝胆湿熱が経脈を通じて下注すると、肝経は陰器（外生殖器）をまとつために、陰部の掻痒、腫脹、発汗や悪臭のある黄色帯下が生じ、宗筋も熱によって弛緩して筋痿（インポテンツ）となり、湿熱が膀胱に下注すると排尿痛、排尿困難、尿の混濁、残尿感などが生じる。舌、脈は湿熱を表わす。</p> <p><方意></p> <p>本方（竜胆瀉肝湯）は肝胆の実火を瀉し、湿熱を清利する効能をもつ。 大苦大寒の竜胆草が主薬で、上は肝胆実火を清瀉し下は湿熱を清泄する。苦寒の黄芩・山梔子は瀉火、清熱すると共に三焦を通利して、竜胆草を補助する。清熱利湿の沢瀉・木通・車前子は湿熱を小便として排除し、また上部の火熱を下泄する。柴胡は諸薬を肝胆経に引導し、肝気を疏通して化火を防止する。生甘草は清熱と調和諸薬に働く。なお、肝経の火熱は陰血を消耗しやすく、苦寒燥湿薬も傷陰しやすいので、滋陰養血の生地黃・当帰を配合して、陰血に損傷が及ばないように防止している。全体で「瀉中有補、利中有滋」の配合になっており、上部の火熱を清瀉すると同時に、下部の湿熱を清泄することができる。</p> <p><参考></p> <p>本方（竜胆瀉肝湯）は苦寒の薬物が多く脾胃を損傷しやすいので、効果があればすぐに中止し、多量の服用や長期の服用は避けるべきである。 脾胃虚寒には禁忌である。</p> <p><校注婦人良方>の竜胆瀉肝湯は、本方の柴胡を除いており、日本のエキス剤にはこれが採用されている。</p> <p>日本での保険適応効能、効果 比較的体力があり、下腹部筋肉が緊張する傾向があるものの次の諸症；排尿痛、残尿感、尿の濁り、こしけ</p>	